

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No. 50 2017年11月

| | | |
|-------------------|---------------------------------------|----|
| 政府機関関連への協力 | 初めてのミャンマー…………… | 2 |
| 自治体・中小企業支援 | 彦根市特別顧問にどっぷり漬かり中…………… | 3 |
| 教育 | 世界ともだちプロジェクト「リベリア どんな国かな？」…………… | 4 |
| | ABICとの出会いから活動参加へ…………… | 5 |
| | 佐倉高校でのプレゼンテーション指導を終えて…………… | 6 |
| | 東京外国語大学とABICの連携による「オープン・アカデミー」開催…………… | 7 |
| | 高校生国際交流の集い2017…………… | 8 |
| 留学生支援 | 東京国際交流館空手教室の歩み…………… | 9 |
| | 兵庫国際交流会館での活動…………… | 10 |
| | 東京国際交流館での活動…………… | 11 |
| 事務局だより | ABIC会員懇親会を開催…………… | 11 |
| | 会員の種類…………… | 12 |
| | 法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数…………… | 12 |
| | 賛助会員入会のお祝い…………… | 12 |

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル23階
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5970
e-mail : mail@abic.or.jp

(関西デスク) 〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24
住友生命本町第2ビル9階
Tel & Fax : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

政府機関関連への協力

初めてのミャンマー

はやし けんいち
林 賢一 (元 伊藤忠商事)

2016年6月末にインドネシア駐在から帰国し、同時に伊藤忠商事を退社。海外経験および食品加工メーカーとしての経験も長くあり、これを有効活用できるような機会があれば、と友人に紹介されたABICに登録。登録後1-2か月で、コーエイ総合研究所が国際協力機構（JICA）より受託した「ミャンマー国投資促進・輸出振興にかかる基礎情報収集・確認調査」の「投資ポテンシャル分析」担当の応募機会を得た。

ミャンマーは2011年の米国の経済制裁解除および2016年4月のアウン・サン・スー・チー氏率いるNLD（国民民主連盟）政権の発足を受け、「最後のフロンティア」として世界中に注目されており、その成長の一助となれればと思い早速応募し、幸運にも採用していただいた。

2016年12月11日（日）の夕刻に直行便（ビジネス客でほぼ満席）で調査団の一員として初めてヤンゴン空港に降り立ち、熱帯特有の生暖かい風を感じ、東南アジアに来たと実感した。日曜日の夕刻にもかかわらず大渋滞で、1時間強かけてヤンゴン市内のホテルに到着。

2016年12月、2017年2月と5月の計3回・6週間ミャンマーに滞在し、日本法人・日系の合弁会社・現地会社等計50社近くを訪問し、現在の仕事の状況や問題点等を聞いたが、総じて渋滞（日常茶飯事）を含めた物流の問題と電力不足（ヤンゴン市内でも毎日停電あり）の指摘があり、この解決なくしては経済の急成長は難しく、まだ時間がかかりそうに感じた。

急速に発展しているヤンゴンであるが、以前にタイやベトナムで感じた「熱気」をあまり感じなかった。他国では残業したい人がほとんどだったが、ミャンマー人はお金ではなく家族の健康に幸せを感じ、家族との時間を大事にしたいと考え、終業時間になればさっと帰ってしまう。敬虔なる仏教徒で真面目で親切な民族性であり、「急成長」ではなく「緩やかな成長」で徐々に慣れる方が合うのかも



ヤンゴン市内 行き交う車に発展を感じる

れない。

産業は農業が主体で、米・豆類は中央デルタ地帯が主産地。ネピドー以北の北半分は海拔1,000m以上の高地で一日の気温差が大きく野菜・果物の好適地（特にシャン州）。また、水産業においては、アンダマン海・ベンガル湾という好漁場を有し、エーヤワディー川等の大きな河川沿いでは淡水魚の漁・養殖が行われている。ただ、軍事政権下の長年の鎖国的政策により古いやり方が主流となっており生産性が低いのが問題。今後の新しい知識や技術の導入・教育・指導により改善が進むと思われる。

また、政府主導で日本が積極的に参画しているティラワ工業団地（ヤンゴン郊外）では第1期の約90社が操業または建設中で、電力供給も約束されており、産業発展の好例になると期待され、第2期以降の土地造成も開始された。そして気になるミャンマー料理だが、タイ・中国・インドとおいしい料理国に囲まれている割にあまり特徴がなく、油を多く使った料理が中心で少し胃に重く感じた。ただ、おいしいビールやワインがありこれはこれで魅力的で、ヤンゴン市内には100軒近くの日本料理屋もあり、日本人には住みやすい所である。

この調査中に知ったことだが、ちょうど同時期に「会長

島耕作」のミャンマー編が週刊誌に連載されており、日本人のミャンマーに対する関心が深まる一助となっているように思われ、私のこの投稿も皆さんに少しでもミャンマーに興味を持っていただければ、と思ってお受けした。

ミャンマーの経済成長にはまだ時間がかかると思われ、私自身大いに興味を持って見守っていきたいと考えている。



ヤンゴン青果市場



ヤンゴン魚市場

彦根市特別顧問にどっぷり漬かり中

いちかわ
市川 いていじ
梯二 (元 三菱商事)

ABICの紹介で滋賀県彦根市顧問職に応募し、同市の大久保市長と面談したのは2013年11月のことである。私は三菱商事に37年間勤務、発電プラントを中心に業務を担当したが、主戦場は海外で駐在は通算21年に及び、機械のみならず全営業・非営業部門、事業投資運営含め、何でもこなしてきた。特に最後の駐在地トルコは相性も良かったせいか駐在期間は10年超にも及び、既存の商圏拡大に加え新たな取引先・商材開発も実現でき、かつ旧ソ連崩壊後突如出現した中央アジア市場開拓というテーマにもチャレンジできたことは商社マンとして痛快の極みであった。それまで国内市場との関わりは薄かったが、商社退職後は、子供の職場体験・介護関連のVenture Businessを立ち上げ、複数の中小企業の市場開拓支援等を手掛け、国内を東奔西走する毎日であったが、それぞれ一定の目標を達成したところで上述の面談となった。もちろん、候補者はそれなりにあったようだが、最終的に私に白羽の矢が立った。

市長からは、2014年4月より市の特別顧問として、ビジネス経験を生かし彦根市活性化のために存分に力を発揮してほしい、毎週2-3日程度彦根にて勤務してほしい、とのことで、当初は1-2年のことと考え引き受けた。ABICとしても地方自治体の中に入っただけの長期勤務というのはレアケースだったのではなかろうか？ 幸い家内の理解、さらに親から授かった体力、持ち前の行動力・好奇心もあって、地方自治体勤務・地方創生・グローバル化といったテーマにどっぷり漬かり、「民間出身・よそ者目線・海外経験」を生かし、飛び込んでみようと、東京での仕事を整理し毎週東京から新幹線通勤することとなり、既に4年目になった。

さて、市長から特別顧問として委嘱された任務は二つ、「地場産業の活性化」と「彦根市の観光振興策」だ。この

ため経済活性化委員会条例を公布、委員会を設置、メンバーは経済関係団体・各産業界の代表、商工会議所、学識経験者より成り、私が委員長を務めた。いずれのテーマも市にとり重要であるが、課題・問題点が山積しており、その解決の糸口を模索している状況であった。委員会に先立ち、



大久保市長（左）と筆者

市役所スタッフのサポートを得て過去の経緯・現状の徹底的分析を行い、頻繁に現場に足を運び経営者たちとも何度も話し合った。その上で委員会にて審議を繰り返し、基本方針を定め、実施主体・スケジュールを含む具体的な行動計画を策定し、市長に対し最終答申を提出した。

詳細は省くが「地場産業の活性化」に関しては、人材の確保・育成、営業戦略テコ入れ・販路拡大策、ブランド力強化、海外展開、の4項目に関し行政として補助金交付だけでなく、打てる手を全て網羅した。あとは実行あるのみで現在はこの行動計画のフォローを行っている。ところで「ドイツ3B」といえば、バウハ・ベーターベン・ブラームスだが、地元の人が言う地場産業「彦根3B」というのがある。仏壇・バルブ・ブラジャー（補正下着）の頭文字を取った呼称だが、いささか強引でバルブのイニシャルはもちろんV。

一方「彦根市の観光振興策」に関しては、彦根ならではの風格と魅力ある観光都市を目指すことになっているが、シニア・女性を中心とした全国的観光ブーム、急増するインバウンド客の取り込みに追い付いておらず、観光人材含む受け入れ態勢の充実、観光メニュー&インフラ整備、情報発信力の強化等やるべきことは山ほどある。同様に市長宛に観光振興策を提出したが、その中で今すぐやるべきこと、中長期的にやるべきことを推進体制・スケジュールと共に示した。いまだ道半ばであるが、一つでも多く成果を出すべく鋭意ワーク中である。なお、地方自治体の活性化に関して考えると多々あるが、本任務終了後に改めて書きたいと思う。



活性化委員会最終答申を大久保市長に提出
左が大久保市長、右側が委員会メンバー、その中央が筆者

教育

世界ともだちプロジェクト「リベリア どんな国かな？」

おやなぎ けんいち
小柳 憲一 (元 日商岩井)

2020年東京オリ・パラ大会に向けて東京都教育委員会は、子供たちの国際感覚を育成する「世界ともだちプロジェクト」を推進している。豊島区立池袋第一小学校は、6月10日に定例の「としま土曜公開授業」を開催し、同プロジェクトに基づく「国際理解教育教室」を開講した。学年ごとに対象国が割り当てられ、5年生は「リベリア共和国」を学習することになり、ABICに対して講師派遣の要請があった。ちなみに、ABICは海外勤務経験豊かな会員を学校の各種要望に応じて講師として派遣してきた実績を持っており、東京都教育委員会から同プロジェクトの支援団体として指定されている。

私は、マイクロエーブ通信網敷設案件（円借款）遂行のため2年間（1977-78年）リベリアに駐在した。コートジボワール、ギニア、シエラレオネとの国境中継局を含む総延長1,000km（うち、舗装道路はわずか100km）にわたる25中継局への局舎建設資機材および通信機器類の輸送や据え付け工事の進捗管理を主業務にしたことから、内陸深部の人々たちを通して、多岐で興味深い生活習慣／風習に触れる多くの機会を持つことができた。

当初、このような体験の紹介程度と理解したが、学校側から、①現地での活動内容、②日本の支援協力形態なども併せ披露するよう依頼された。通信事業の紹介になると、例えば、通信衛星を介したGPS機能付きのスマホを使いこなす児童に、地上をはうように築く通信網敷設工事の大変さなどを、いかに平易で、分かりやすく説明するかが、大きな課題となる。

5年生が世界気候帯を学習していることを知り、アフリカ大陸の四気候帯を色分けした分布図を作成、赤道直下リベリアが属する熱帯雨林気候帯での環境の厳しさをまず訴えた。

リベリアの歴史は、米国の「解放奴隷」を抜きに語れないが、児童には「奴隷」という概念理解が難しいとの助言をいただく。そこで、リベリア国旗と米国独立時の星条旗を並べて呈示、その類似性や相違点をクイズ風に説明し、解放奴隷のアフリカへの帰還計画、入植から建国に至る経緯、国や首都の名前の由来を話に交えながら、リベリアの特異な歴史を紹介した。

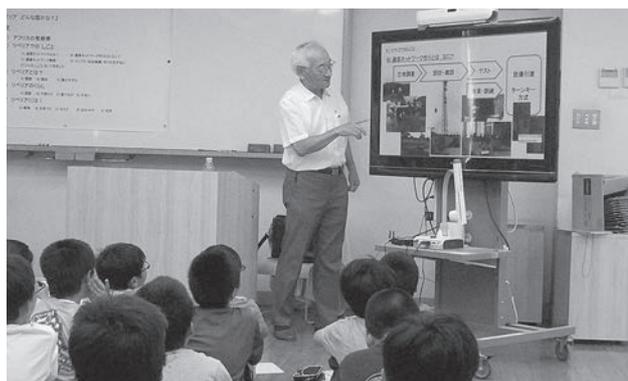
「インフラ整備」については、蛇口をひねるだけで水が出る「当たり前」の日本、その「当たり前」がない国に日本の支援で「当たり前」をつくりあげてくれるお手伝いをする実行部隊と位置付けた。庭に植えたスイカを刈り取られ家主に抗議したところ、逆に「毒蛇を素早く発見するため、軒下から幅2-3mは土を露出させておけ」、と大目玉を食った話を写真で紹介しながら、現地での「生活の知恵」「タブー」を知る大切さを訴えた。傍らに展示した象牙ブレスレットなどの小物土産品、日本語表記の現地切手類には、予想以上の関心が集まった。

後日届いた児童からの感想文で、前述の平易な表現や工夫が、児童の理解を促したことを知った。「パソコンで調べても少なかったリベリアの情報を補足できた」とのコメントも多く、生きた実体験を紹介する目的にかなったと思われる。最後に「外国人との交流には積極的に参加しよう。そして、彼らの国の言葉で『ありがとう』と言おう」と提案したところ、「頑張る」との反応を示した児童が多く頼もしさを感じた。

この種の企画に応えるABICの国際相互理解への支援は貴重であり、その役割も大きく、さらなる活用を期待します。併せ、今回このような機会をいただきましたこと、お礼申し上げます。



リベリアの子供たち



講義風景

教育

ABICとの出会いから活動参加へ

ひさどめ さとこ
久留 聡子 (元ルノーアジアパシフィック)

ABICとの出会い

私がABICを初めて訪れたきっかけは、第一回日本語講師養成講座だった。語学教育に興味があり、フランスに留学してフランス語教授法の大学院課程を修了した私に、「日本語を外国人に教えるという逆も学ぶことでより豊かな指導ができるのでは？」と伊藤忠OBの亡き父（ABIC会員）に誘われたことがきっかけだった。後に日本語教師養成講座の講師になられた鈴木松子先生と同期で楽しく学んでいたが、出産のため講座をやめることとなり、人生初のドロップアウトという苦い経験がABIC活動のスタートだ。近い将来、リベンジを果たし「言葉×異文化理解」を相互に伝えられるようになりたいと意欲に燃えている。

大学での講師経験

ご縁をいただき、名古屋外国語大学にて「国際ビジネスマン等が見た現代社会—グローバル時代を生き抜くために」というテーマで講義をさせていただいている。そうそうたる講師陣の皆さんの中に自分の名前を見て、「私が何を提供できるのか」をひたすら考えた。学生たちに少しでも年齢の近い立場として、就活への「希望」より大きな「不安」を抱える学生に寄り添い、リアルなビジネスの現場を具体的にイメージさせること、ビジネス経験よりも、どのようにビジネスのシーンに一步を踏み出したか、より良い働き方、魅せ方を創意工夫したかを話すようにしている。より良い社会人デビューのヒントになればと願っている。

2016年度より英語で「グローバルタレント」に関する講義をするという新たなご依頼をいただいた。フランス語

が得意な私にとって英語で講義することは大いなる挑戦だったが、「声がかかるといことはやれるということだ」と信じて、先輩方と共に「志事」に携わらせていただいている。こんな光栄なことはないと感謝している。

文学部卒の2児の母の私が、ABICという団体に光を当てていただいたことで予期せぬ大舞台に立たせていただいた。こんな私だからこそ、今は職歴ゼロの学生たちに勇気を与えられることもあろうと、日々、キャリアを積むべく勉強を重ねながら、魅力的な切り口、伝え方を極めて学生たちに還元していきたいと意気込んでいる。

世界を股に掛けて活躍するグローバル人材育成を目指して

ABICの皆さんは、コミュニケーション能力に長けていて好奇心旺盛でチャームな方ばかりだ。誰とでもすぐ打ち解けて仲良くなろうとする父と一緒に働いていたかもしれない会員の皆さんに会うと、目頭が熱くなることもしばしばだが、ABICでの活動と出会いが父ののこしてくれた一番の宝物だと思っている。

余談だが、草の根レベルではあるが幼児向けの語学教育をスタートした。ABICの皆さんと接するにつけ、世界で通用する人材になるには、単なる語学力だけではなく、日本人としての誇り、アイデンティティーを同時に育てなければならぬとひしひしと感じたからだ。このような壮大なプロジェクトを考える視点を持たれたことも、ABICの活動があったからこそだと思っている。ABICの皆さんから受ける細胞が活性化されるような刺激を言葉にし、若い方々に伝えていきたい。



学生の皆さんと（前列左から6人目が筆者）

教育

佐倉高校でのプレゼンテーション指導を終えて

まだまだ 徳田 てつお 哲夫 (元 三井物産)

千葉県立佐倉高等学校は文部科学省よりSuper Global High School (SGH) の指定を受けており、その活動の一環として生徒が諸外国に行き、現地の高校生を対象に英語によるプレゼンテーションを実施し交流を図っている。オランダ、豪州、英国などへの派遣実績があり、2017年度も9月に生徒17人がシンガポールに行く予定となった。この企画の具体的指導をするために八木達也氏、荒川昌佳氏と共にABICより派遣され、4回にわたってプレゼンテーションの指導をすることになった。

佐倉藩の藩校として創設された「学問所」を源とする佐倉高校は220年の歴史を持つ伝統校で、全校生徒960人の千葉県有数の県立高校である。事務局が入る木造校舎のたずまいは同校の長い歴史を表している。

今回の指導に当たっては、生徒の発表テーマ設定の経緯や準備状況、また学校側の指導方針等の予備知識が全くないままでのスタートだった。

われわれ3人がそれぞれの担当グループへの指導を開始してまず感じたのが、生徒が取り上げたテーマが大規模で、7分程度のプレゼンテーションでは到底まとめきれないし、結局理屈だけの主張になり聴衆の興味を引く内容にはならないとの危機感であった。地球温暖化や世界食糧問題を取り上げるのは不適當ではないが、もっと身近な疑問点からアプローチするべきとしてまずは発想の転換を促し、その上で日本語の原稿を大幅に書き直す作業が始まった。

この時点で、4回の教室内指導のみでは日本語・英語の原稿作成および添削からポスター・パワーポイントの準備までは到底できないと考え、生徒とのメール交換で添削を進めることを学校側に提案し、受け入れられた。おかげで2回目の指導後にはほぼ全員が日本語原稿を完成させ、英文作成の開始となった。

日本語作成段階でも指導したが、英文作成の段階であら

ためて感じたことは、事実の説明、個人の感想、結論と主張などが混在しているため、内容が分かりにくく、主張が曖昧になっている点であった。これは構成の問題であり、聴いているシンガポールの生徒たちが理解できないと思われた。従い、3回目の指導では全体の流れを明確にし、その上で平易な単語で理解しやすい文章の作成を心掛けるよう伝えた。書き直した英文原稿をベースに再度メールでのやりとりを繰り返し、何とか4回目の指導までに、英文原稿は完成した。

最終4回目の指導では、導入部分と終わりのあいさつを加えて、各自の原稿を読み上げてもらい、発音や抑揚の指導を行った。生徒たち共通の欠点は単語を一つずつ読んでおり、文章としての抑揚が少ないため、聞き取りにくい点であった。これを改善させ、その後ポスターやパワーポイントでの資料作成要領を説明し、指導を終えた。

われわれ3人は毎回学校に行く前に指導状況のすり合わせを行い、グループ間で内容と進捗・進歩度合いに差が出ないように注意しながら進め、結果的には、生徒との信頼関係を築きながら当初の計画通り指導を終えることができた。今回の指導全般を振り返ると、最初のテーマ選択の段階から関与して、身の丈のテーマ設定、日常生活からの発想、平易な言葉での表現という基本方針を早い時点で共有していれば、さらにスムーズで中身の濃い指導ができたのではないかと思われた。

今回の企画は高校生としてはレベルの高い試みだが、参加した生徒は優秀で、指導に対し素直に耳を傾けていた。最後に、このプレゼンテーションは国際人として将来活躍するための第一歩となる記念すべき挑戦であり、自信を持ってこの恵まれた機会を活用し、大いに楽しんでくれるよう、はなむけの言葉で締めくくった。



事務局校舎の前で (左から筆者、八木氏、荒川氏)



指導風景

教育

東京外国語大学とABICの連携による 「オープン・アカデミー」開催

ICSICセンター長（日本経済新聞社客員、元常務取締役） **和田 昌親**

東京外国語大学の社会・国際貢献情報センター（ICSIC）と国際社会貢献センター（ABIC）は包括連携協定を結び、定期的な情報交換にとどまらず、スーパーグローバル・ハイスクール（SGH）への講師派遣での協力、留学生の活用拡大などさまざまな活動を展開している。そうした相互協力をさらに強化するため、東京外大の一般人向け講座「オープン・アカデミー」にABIC会員の講師を派遣することとし、2017年8月29-31日に初めての「産学連携国際講座」を都内で開いた。副題は「海外事情に詳しい国際ビジネスマンと外交官が語る世界の日本」で、オープン・アカデミーとしては異色の連続講座となった。

オープン・アカデミーは東京外大の名物講座だが、これまでは語学の初級コースが中心で、ビジネスや外交とは無縁の講座だった。しかし、東京外大に言語文化学部だけでなく「国際社会学部」が誕生し、本物の国際人を育てるカリキュラムが重要な位置を占めるようになってきた。大学側は世界経済、国際政治、海外ビジネスといった実践的な教育を強化しつつある。

そんな実情に合わせ、今回ABICの会員が海外ビジネスの経験、知見を提供、「産学連携国際講座」の形が実現した。講座は3日連続。初日と最終日はABICの会員、2日目は東京外大出身の元外交官が担当した。それぞれの講師の国際経験等に基づいた講義であった。

1日目は、ロシア経済をテーマとするものであり、講師は丸紅の元ロシアCIS総代表の朝妻幸雄氏であった。長年にわたりロシアを間近に見てきたロシア通である。日本では、ロシアといえば北方領土に関心が集中しがちであるが、

幅広い観点からロシアという国を見つめたいという講師の視点がよく出た講義であった。

2日目は国会勤務の経験を持つ元外交官・名井良三氏であった。名井氏は外務省ではブラジル勤務が長く、ベレン総領事のあと、アフリカの資源国アンゴラの大使を歴任している。今回の講義内容は、日本の国会というものの説明から始まり、総理や閣僚も追いつめられることもある国会の制度というものを取り上げた。また、安倍総理が狙う長期政権と外国、特にアフリカの長期政権の比較を行い、最後に南スーダンから撤退したばかりの日本のPKOについての解説であった。

3日目は、元三井物産戦略研究所社長であり現在もその特別顧問を務める中湊晃氏の講義であった。「世界経済の動きを見る」と題し、1990年代の経済から始まり、その後、現在、そして将来の世界経済へと移行した。話は中国、米国、ロシアなどの国々にもおよび、世界経済という大きな視点からの講義であった。世界各地を幅広く動き回ってきた講師の知見がよくあらわれた講義であった。今回の講座は、各種の分野を扱う広範な内容のものであった。

講座開設の場所が東京外大の本郷サテライトというさほど広くないところだったため、参加者の数が30人に限定され、残念な印象もあった。それでも参加者の年齢層は高校生から退職者まで幅広く、「産学連携国際講座」への関心の高さをうかがわせた。大学側もABICも今回の結果を踏まえ、さらに講座の中身を改善し、魅力ある連携講座にすることを考えている。



講義風景

高校生国際交流の集い2017

たちばな ひろし
橋 弘志 (関西デスクコーディネーター、元 三井物産)

関西学院大学との取り組みの一つである海外からの留学生と日本人高校生の交流行事「高校生国際交流の集い」は、今回で11回目の開催となった。この間、大学側担当部署の一貫した方針と各方面への配慮、企画・準備段階を含め行事を現場で推進する在学生スタッフの意欲と実行力、生徒を本行事に参加させる高等学校の変わらぬ積極的な姿勢、加えて、海外からの留学生を支援する関係団体の本行事への理解と協力等が一体化し、今や恒例の行事として定着してきた。高校生の参加希望者も先輩から後輩への引き継ぎにより年々増える傾向にあり、学校側が人数を絞ることに苦慮するケースも散見される。また、近年、新たに参加した高等学校の反復参加など、この行事に対する一定の教育効果を評価していただいていると思われる。

2017年の「高校生国際交流の集い2017」は、関西学院大学上ヶ原キャンパスを会場に「Link us to next」(夢にきづこう、橋をきずこう)というイベントスローガンの下、7月27日、28日の2日間にわたり開催された。大阪府立千里高等学校、大阪府立箕面高等学校、兵庫県立宝塚西高等学校、兵庫県立国際高等学校、兵庫県立長田高等学校、兵庫県立兵庫高等学校、啓明学院高等学校、関西学院高等部、関西学院千里国際高等部の9校から計56人の日本人高校生と、米国、カナダ、アルゼンチン、ブラジル、フランス、ドイツ、フィンランド、スイス、デンマーク、豪州、中国、タイ、フィリピン、13カ国からの留学生計28人が参加した。参加者総数は過去最大の84人となり、行事を運営する関学学生スタッフも各学部から総勢42人が参画した。

2016年3月に関学内に組織されたKGIH (Kwansei Gakuin Global Inspiration with High school) が2年目の

活動として本行事の企画、準備、遂行まで全ての作業を担当した。行事初日は、関西学院大学研究推進社会連携機構社会連携センター長、野村教授の開会あいさつで始まり、続いてABIC会員の瀬尾さんが「多文化共生を考える」というテーマにつき、英語で自身の海外生活経験を交えユーモアあふれるスピーチを行った。昼食後、体育館で留学生と高校生は協力しながらチーム対抗ゲームに興じ打ち解け合った。2017年は参加者が多く、9グループに分かれ、大学生のリードによりグループごとに決められたサブテーマにつき高校生と留学生はディスカッションを開始した。夕食後は、関学の宿泊施設に移動し、交流を続けた。

2日目もグループディスカッションを続け、グループごとにまとめた結果を各グループが表現方法に工夫をしながらプレゼンテーションを行った。参加高校からの教諭、留学生を本行事に派遣いただいた機関からの来賓に、ABICも加わり審査の結果、優秀および準優秀グループを選定し、懇親会席上でABIC岩城理事長より表彰状を授与した。次いで野村教授より全参加高校生、留学生に修了証が授与された。最後に岩城理事長より閉会のあいさつが行われ、恒例となった参加者全員での写真撮影を行った。行事終了後も参加者がSNSを通じ交流を続ける等、時代を反映したツールを駆使した現象も見られる。KGIHの学生が編集、作成する参加者用ガイドブックも年を追うごとに中味が充実してきている。

これからも関係者の意見を取り入れつつ、高校生にとって、また彼らをリードする大学生にとって、より実りある行事となるようにしてゆきたい。



グループディスカッション



参加者全員で

東京国際交流館空手教室の歩み

東京国際交流館 空手教室講師 なりた 成田 まさあき 正彰 (元 住友信託銀行)

東京国際交流館の空手教室は日本文化紹介事業の一環として、2002年6月に第1回がスタートし、その後15年にわたって月1回のペースで連綿と続いている。

なぜ武道系の日本文化として相撲、柔道、剣道ではなく空手が選ばれたのか。

おそらくけがが少なく安全で、装備品等が比較的少なくて済み、場所も取らず、経済的な武道だったからであろう。

空手は沖縄で自己防衛、自己保存を目的として、自然に発祥した武術で、その後中国の拳法等の影響を受けながら発展してきたものであり、大正初期に富名腰義珍氏により日本本土に伝えられている。

日本本土に伝わった空手は慶應大、東大、早稲田大、拓大、中央大等の学生を中心に、武道空手として発展してきたが、1945年頃から競技化が進み、現在ではスポーツ空手としてオリンピックの種目に採用されるまでになっており、愛好家を含めた空手人口は1億人を超すといわれている。

スポーツとしての空手には、組手と形の二つのカテゴリーがあるが、組手は勝負の面白さ、形は力強さとともに、踊りに似た美しさの魅力があり、若者を中心に人気が高い。一方、武道空手は本来の空手の神髄を探る空手道探索の大きな魅力がある。

当教室では時間的制約から、スポーツ空手の入門編を教

えているが、学生が日本文化としての空手を理解し、空手の愛好家に育つことを願っている。

現在の指導陣は大橋、矢島、成田のABIC会員3人が務めているが、いずれも慶應義塾体育会空手部OBで、全日本空手道連盟公認六段と日本体育協会公認空手道上級指導員の資格を持っており、後期高齢者ではあるが、何とか対応できているものと自負している。

当教室はABICが特定非営利活動法人として発足した翌年に、慶應義塾体育会空手部OBの和田定治氏が、伊藤忠商事OBの片山正雄氏から依頼を受けて立ち上げたもので、しらい爾来数多くの学生が巣立っていった。当初は欧米系の学生が多く、やがてアジア系の学生が中心となり、近頃はアフリカ系、アジア系、中近東系の学生が多くなっている。

思い出に残る学生として、英国からのアンドリュー・グブソン君がおり、彼は慶應のOB稽古にも積極的に参加し、公認二段を取得した。東日本大震災の影響で、三段の審査は受けられなかったが、実力三段の力はわれわれも認めるところである。

現在、彼はイングランドで1男1女のパパとして暮らしており、空手への関心も残っているようだ。いつかまた彼のような積極的な空手愛好家に会いたいものと思う。



留学生支援

兵庫国際交流会館での活動

日本語・文化教室

2015年5月開始の留学生を対象としたABIC日本語教室は、初年度の延べ受講者が759人だったが、2016年度は1,531人に増え、2017年度は1,800人を見通している。増加の理由は、従来のABEイニシアティブによるアフリカの学生に加え、東南アジア、とりわけミャンマー、カンボジア、ラオス、フィリピンからの国費留学生が多く入館したため、日本語初級クラスを大挙して受講、大きい部屋を2分し対応している。従来は月間平均130人程度であったのが、10月度は280人と倍増している。週3日4クラスで12人の講師が、日本語のみならず学生との多様な異文化交流もしている。

一方、2015年6月開始の文化教室も順調に推移しており、とりわけ空手教室は常時7-10人の受講者でにぎわっており、アフリカの女性徒からは、「これで夜道を歩いて

も怖くない」との発言もある。華道も根強い人気があり、毎回6-8人の受講者があり、常連の中には修了証の取得を目指す人もいる。2017年同様、2018年1月にも新春生け花体験教室を開催し、20人程度を迎える予定をしている。書道教室は、一度経験しても長続きせず、参加者の確保に苦労してきたが、このたびの新入生は書道に興味を示している者が多い。在館生でウズベキスタンからの主婦は子供を連れて受講し、ABIC担当が一時子供の相手をする場面もあった。



秋の新入館生歓迎バザー

10月14日（金）の新入館生ウエルカムパーティーに続き、10月22日（日）に歓迎バザーが開催された。これで7回目だが、秋の新入館生65人はじめレジデント・アシスタント（RA）を含む既入館者と一部外部の来場者を加え約190人がバザーに参加した。今回もABIC会員および支援企業とその社員、ならびに日本貿易会の役職員等の方々から65箱を超える広範な品物を関西地区のみならず関東地区からもご寄贈いただき、6万4千円の売り上げを得ることができた。この売上代金は、同館の留学生支援活動資金として提供させていただいた。ご支援くださった皆さまには厚く感謝申し上げます。

兵庫国際交流会館には、ABEイニシアティブによるアフリカ諸国の留学生が多く、ジンバブエ、マダガスカル、トーゴ、ニジェール、カメルーン、ガンビア、スワジランドからの学生が今秋新たに加わり、前述の東南アジア諸国からの学生も増えている。来日間もない暑い気候の地域からの学生にとり、初めての冬を控え極めて安価で提供される衣

類や生活必需品は、払底するほど好評であった。関係者からは次回も引き続き開催してほしいとの要望があった。バザーには、関西デスクに加え、日本語講師も参加し入館者との交流も行った。ABIC関西デスクでは、関係者の協力を得てバザー以外でも、日本語・文化教室を行っており、さらに広範囲な留学生支援活動を目指し、関西在住の会員の皆さま、お知り合いの方にはこの方面でもご支援、ご協力をお願いしたい。（関西デスクコーディネーター）



留学生支援

東京国際交流館での活動

国際交流フェスティバル

2017年国際交流フェスティバルは、昨年制定された祝日「山の日」の8月11日（金）に開催された。当日は4,836人の来場者を迎え、各国の自慢料理コーナー、福島物産品販売、N700ミニ新幹線の試乗、アニメソング・ライブ、国際のだ自慢大会、縁日体験コーナー等盛りだくさんのプログラムが続いた。

ABICは月例の日本文化教室講師の方々とはボランティア

の皆さんのご協力を得て、茶道、華道、書道の体験教室と着付け指導を行い、500人を超える参加者に日本の伝統文化に触れる機会を提供した。

夕なぎとともに始まったのは恒例の盆踊りで、江東区民の皆さん、交流館長、留学生、ABIC会員等との楽しい交流のひとつとなった。

(留学生支援担当コーディネーター)



事務局だより

ABIC会員懇親会を開催

2017年9月21日（木）18時～19時半、メルパルク東京において会員懇親会を開催しました。正会員、活動会員ならびに日本貿易会関係者など125人の参加を得て、小林会長の開会あいさつに続き、岩城理事長の活動報告および乾杯発声の後、会員同士の活発な交流、懇親が行われ、盛会のうちに終了しました。



小林会長開会あいさつ



岩城理事長活動報告

【訂正】 Information Letter No.49(2017年6月号)p.6に誤記がありましたので、お詫びして訂正いたします。

2016年度（平成28年度）決算及び2017年度（平成29年度）予算

| 2017年度予算額 | (誤) | (正) |
|-----------|----------|----------|
| I 経常収益 | | |
| (3) 事業収益 | 71,192 | 71,192 |
| 日本貿易会 | (24,192) | (24,192) |
| その他 | (53,000) | (47,000) |

会員の種類

| 種類 | 内容 | 年会費 |
|------|--|--------------------|
| 正会員 | センターの活動を推進する個人、法人および団体。 (理事会の承認を得て入会) | 法人および団体 1口 50,000円 |
| | | 個人 1口 10,000円 |
| 賛助会員 | センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、ならびに個人、法人および団体。 | 法人および団体 1口 10,000円 |
| | | 個人 1口 5,000円 |
| 活動会員 | センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。 | 不要 — — |

(2017年10月末現在)

正会員

団体・法人（16社、1団体）〈社名五十音順〉

〈10口〉（一社）日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)
 〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（12名）〈入会順・敬称略〉

池上 久雄 寺島 実郎 小島 順彦 宮原 賢次 吉田 靖男 岡 素之
 佐々木 幹夫 勝俣 宣夫 〈3口〉 小林 栄三 槍田 松瑩 〈3口〉 市村 泰男 齊藤 秀久

賛助会員

法人（3社）〈社名五十音順〉

(有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ NPO法人賛否両論 〈3口〉

個人（358名）

下記は2017年6月以降にお申し込みいただいた方です。ご協力に深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)
 〈1口〉 阿部 道弘 高木 純夫 日野 武彦 山脇 隆司

活動会員 2,809名

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員およびその他の個人の方、
 ならびに法人および団体の皆様のご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル23F

TEL : 03-3435-5973 FAX : 03-3435-5970 E-mail : mail@abic.or.jp